2009.3.14　質問・回答　記録

1．質問・回答

Q：「直接的」「補助的」とはどのようなことか？

教育活動の中では人的環境が大切であり、施設を「直接的」と言ってしまっていいのか？　ある意味では施設は「補助的」ではないだろうか？

A：「直接的」な効果：そのコーナーが存在すること、そしてそのコーナーで子どもたちが遊ぶことによって得られる効果。

「補助的」な効果：そのコーナーに子どもが実際に行き、遊ぶことを促すような効果。

Q　「コーナー」とはどういう定義なのか？
「専用」ということなのか、「仕切る」ということなのか？

A：仕切ってあることは必要ではない。壁際にある机に座るとお絵描きができるような所もコーナーである。

アンケートに書かれていたコーナーは保育者のそれぞれの感性によるものなので、定義がばらばらになってしまっている。統一的定義で見てみると，分析結果に精査がもたらされるか，これから取り組んでみるつもりでいる．

「コーナー」のつくりによっては，使われやすいコーナーも，そうでないコーナーもあるだろうし，コーナーのつくりによって滞在時間が異なるなどのこともあるだろう．それは，別の検討課題である．

専用かどうかも，長・短それぞれの時間的観点から考えれば完全に常設のコーナーは存在しないであろうし（1日の間で変わることも，数ヶ月で変わることも，数年で変わることもある)，無理に定義をすることではない．

Q：各コーナーの規模はどのくらいの利用人数を許容できると考えられているのか？
必修のコーナー、季節のコーナーは最大でどのくらいの子どもたちが活動できるのか？

A：3歳以上の子どもたちは全部で150人ほど在園している。クロークのコーナー、絵のコーナーは全員が入るには狭い。しかし、子どもたちは一斉に登園（バス通園）してくるのではなく、会社の時差出勤と同じようにばらばらに登園してくる。朝の登園をしてくるなかで一番多くなるタイミングで、60人ほどになるので、50人ほどの子どもたちが活動できる。大きさで作られている。
テーブルのセッティングは小学校のようなみんなが同じ向きで座るものではない。子どもが間を通ることができ、ぶつからないような配置になっている。
造形のコーナーは子どもたちがとても多くなることがある。このコーナーでは座って何かを作るというのではなく、立って真中にあるテーブルに集まって作る形になっている。作るための道具はバックの中に入っていて、道具を取ってテーブルに行き、物を作って、そして他のコーナーに遊びに行くというようになっている。テーブルの周りには多くて20人ほどの子どもたちが集まれるようになっていて、そのテーブルが2，3か所用意されている。

子どもたちは希望するコーナーに席がない場合は、空くまで待つことになっている。(全員分の席を用意しているわけではない。)
→「待つ」ことも一つの学習をとしている。

ランチルームも150人全員がはいることはできず、食事の時間を3回に分けている。(1回目　60人、2回目　60人、3回目　30人)　これは登園した順番になるようになっている。

→　各コーナーが飽和せずにそれぞれで充分に遊べるようになる。
全員が必ず使うコーナー，同じタイミングで一斉に使うコーナー，自由遊びに使うコーナー…などにより規模の設定もちがう

→　コーナーの規模を「空間としてどのくらいの大きさがどのくらいあるか」ということで考えるだけでなく、時間的な要素も含めるべきではないか？

子どもたちの環境を考える際、0，1，2歳児の環境が重視されている。規模に関して、現在は「最低基準」というもので考えられているが、それよりも「こどもにとってふさわしい規模の基準」というもので議論していくことが重要ではないか？

Q：コーナーというのはどのくらいの設えからコーナーとなるのか？アンケートで，理想の人数規模を訊いている質問があるが，その答えがどの程度であったかまとまっていたら教えて欲しい．

A：どのような大きさでもコーナーである。その中でよく使われるコーナー・あまり使われないコーナーや、いろいろな遊びが展開できるコーナー・一つの遊びに特化したコーナーが存在する。

小さい子どもたちの場合コーナーを作りこまなくてもよいことがある。小さい子どもの場合は場所をあまり意識し

ておらず、好きなおもちゃ・好きな保育士さんがいるところが好きな場所になっている。成長してくるにつれて、場所と物と行為が連動して好きな場所になっていく。

→学齢によってコーナーの意味合いが違ってしかるべき。

季節による変化があるので「完全な常設のコーナー」というものはなく、季節・時間的な評価をしていくことが大切である。

「理想の人数」を訊いているが，これについては，回答から得られた平均値などが１人アルクすることが危険と考え，アンケートから得られた数値をそのまま用いるのではなく、現場の様子と併せて示していきたい。(例えば，アンケートの中の「保育室の評価」で「ちょうどいい」というものが非常に多かったが、保育園の先生方はいまの保育室のなかでそこにある環境を作っているので、「現在のものでベストを尽くしている。だからちょうどいい。」という捉え方をされているのではないかと思う．規模などの基準や標準を提案する際にはこの「ちょうどいい」という評価をそのまま鵜呑みにすることはできないので，慎重に扱う必要がある。)

Q：こどものもりにおいて今の規模が最適であるかどうか？
A：こどものもりは幼稚園と保育園が一体となったものとして考えて建てられた。

幼稚園の定員が200名であったが、一体型のものにするためにその当時の最低の定員（幼稚園105名､保育園50名）に変更した。理想はより少ない人数で保育を行いたいと考えていた。建物の規模もこどもの人数もこれ以上は大きくしたくはない。これ以上大きくなると、保育士の目が行きとどかない場所がでてきてしまう。こどもが遊びたいコーナーで遊べなくなってしまう。

時期によって様々なコーナーがあり、今あるコーナーを最善のものと考えずに、子どもたちの遊んでいる様子を見ながら、コーナーの大きさ、場所を決めていく。その時期のこどもたちの姿に合わせ、スタッフの話し合いの中で、自由に動きのとれるコーナーを作る。そのために壁の取り払われた園舎になっている。

２．こどものもりの先生方のお話
～こどものもりでは「コーナー」をどのようにして取り扱っているか？～

・保育園の園長先生

園全体を一つの保育室としてとらえ、その中で子どもたちが遊びたくなるような場所を提供する。その場所がコーナーである。(→　保育室の通常のイメージと違った室になっている。)

壁を取り除くことで、園全体を一つの空間にする。

先生が子どもたちを主導していくのではなく、子どもが自分の意志で遊びを選択するような場所、コーナーを提供する。

保育者は「仕掛け人」である。子どもをコーナーに連れてきて遊びを行わせるのではなく、子どもが自分から遊んでみたいと思えるように援助をしていく役割を持つのが保育者である。大人が主体になり前面に出るのではなく、後ろから子どもたちを見守るようにする。

大人が入口に立った時に「遊びたい！」と自分で思えるような部屋を作ることが大切である。

（保育室内の環境設定としての「お片付け」について）環境設定の目的として、子どもたちが先生に言われて片付けるのではなく、自分で使ったものを自ら片付けられるように、子どもがやりやすい（わかりやすい）ようにする。

ex　片付ける物の写真（絵）を棚にはっておく。

ハサミなどは子どもたちの数えられる範囲の数（例えば５）ずつ箱に入れておく。

同じ色のマジックが５本ずつ入るような箱を作り、同じ色のテープを貼っておく。

・外遊びコーナー担当の先生

子どもが遊びたくなるような仕掛けが必要ではあるが、魅力的な場所が多すぎると子どもたちがまよってしまう。
→各コーナーでさらに充実して遊ぶために、コーナー同士の連携が重要。

ex　造形コーナーで作ったものでおままごとをする。造形コーナーで作った凧を外であげる。

そのためにはコーナーの先生たちのミーティング、先生同士のつながりが大切。毎日､各コーナーの様子を報告し、話し合い、翌日以降のプランニングをしていく。

・自然コーナー担当の先生

季節の物を栽培・収穫・調理し、さまざまな経験をすることが目的である。

居心地がよく、温かい雰囲気の空間を作ることで子どもたちが集まる。

子どもたちが自主的に行動できる空間をつくる。→自分でやろうとする。

・「こどものもり」のコーナーの説明

7つのコーナーがある。

①クロークのコーナー

お着替え、自分の荷物の整理のための場所。子どもたち同士で助け合い自立を促す。

②絵のコーナー

毎日、園にやってきて、好きな絵を必ず1枚描く。自分の気持ちを園のモードにするために、絵を描いて気持ちを落ち着かせる。園に来るまでの気持ちが絵に表れてくる。毎日、描いた絵を自分の引出しにしまうことで、自分の持ち物の整理整頓を学ぶ。

③造形のコーナー

ⅰ）廃材を利用して、自分の好きなものを自由に作れる場所。

ⅱ）季節の物を作れる場所。（先生たちがふさわしい材料を用意して、子どもたちが季節の物を作りやすいように環境を作る。）

④ごっこのコーナー

いろいろな生活体験をできるようにしてある場所。
行事に影響されやすい。(ex　健康診断→お医者さんごっこ、年賀状（正月）→郵便屋さんごっこ）

⑤表現コーナー

楽器に触れて遊べる場所。音楽、劇遊び、大型積み木 etc

⑥外遊びのコーナー

砂場、体を使って動くことのできる場所など様々な種類が含まれている。

⑦自然のコーナー

飼育・栽培のための場所。野菜の収穫や花の栽培をおこなえる。小動物とのふれあいもできる。

まとめ：佐藤

現状の調査・分析によると、倉斗、山田らの報告から保育施設環境の評価は、1人あたり面積というよりも、活動面積の大小やクラスの園児数の影響が強いことがわかった。

また、白石・早川らの報告から学齢が上がるにつれて環境に対して巨視的になっていくことが明らかになった.

今後さらに、活動展開や空間把握発達に関する研究等の追加調査・分析を行い、保育施設環境の適正規模の導出を進めていく.

厚生労働科学研究費補助金
政策科学総合研究事業（政策科学推進研究事業）

保育・生活場面の展開と心身や空間把握能力の発達からみた保育施設環境の所要規模に関する研究

平成 21 年度　総括研究報告書
（２年目単年の報告書，他に 20-21 年度の総合報告書アリ）
研究代表者　佐藤将之
平成 22(2010) 年 3 月

早稲田大学人間科学学術院　助教　佐藤将之
〒 359-1192 埼玉県所沢市三ヶ島 2-579-15
E-mail: masayuki57sato@yahoo.co.jp